

聞名仏教

第 129 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 6 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

真宗の信心

佐々木蓮磨

寺に参って仏法を聞かせていただきたいと、そうして苦悩を打ち忘れてお念仏を喜ばせてもらえるから、その間だけでも極

って人と争い、敵や仇を作ったり、邪見におちいって自己の罪をみずから許したりするような結果になっては、かえって聞かなかつた方がよかつたといわねばならないでしょう。また、人

ご開山聖人は「聞くとい

年を重ねて参りましても、

楽である、といつてお寺に

寺に参り仏法を聞く人があ

うは信心をあらわすみ法なり」とお示しになり、蓮如上人は「信心は聞くにきわまる」と仰せられました。

えって大きな過ちを犯し、恐るべき邪道におちいる危険があるように思います。

苦しみ悩むのです。これでは、いつまで経つても救われる時はこないでしょう。

願つたり、この世が都合よく行かぬ時は、来世の極楽参りを願つたりする人です。

まことに真宗の救いである信心獲得の道は、ただ聞法の一手にある、とはつきり

そこであたくしは、仏法を聞くという事は、もちろん大切であります、それに先立って、まず聞く心

また、人によると聴聞して物知り同行になり、玄人同行になつて驕慢きょうまんに止まること

参りも真の安住はできず、幸福はつねに未来の

聞といふことが、きわめて重要となるのですが、その聞くことについても、いろいろ

要であるといふことを申したいのであります。ご当流の聴聞は娯楽のために聞く

とをいつて地獄を作ります。とうといお念仏を称えながら地獄道を進まねばならぬ

ごとくに考えられているようですが、これは大いに反省せねばならぬ問題です。

思ひます。たとえば慰安のために聞く人もあれば、物知りになりたいために聞く

のでもなく、物知りになるために聞くのでもなく、また信心や安心をこしらえる

という悲劇を演ずるのです。これがどうして仏法聴聞といわれましようか。

蓮如上人が「極楽はたのしきところと聞いて参らんと

人もあり、また利益を目的にしたり、極楽まいりを当てにして聞く人もあろうと思ひます。たとえ同じよう

ん。どこまでも救われるために聞くのでなくてはならないと思ひます。その救い

お寺に参つて仏法を聞かせてもらうことは結構ですが、いたずらに人生苦を、

願いのぞむ人は仏にならず」とお戒めくださつたように、

に善知識のとうとい教えを聴聞しながらも、その聞く態度、聞く心がまえが誤つ

ては、いろいろと苦しい事や煩わしい事があるが、お

説教のお話や、念仏の声でごま化したり、驕慢に留ま

迷いの欲界をいよいよ深め

ていくのみでしかありません。わが親鸞聖人のお説きになる極楽浄土というものは、獲信の一念に仏心をおただき、その仏心から当然に開け行く未来の世界でなくてはならぬと思えます。今日なお享樂的、また功利的な気持ちで浄土参りを願っている人びとの多いことは、まことに悲しむべき姿ではないでしょうか。

また近來は皆様もご承知のとおり、いろいろな新興宗教が流行して、盛んに現世の利益を説いております。そのため真宗に流れを汲む人たちの中にも新興宗教に足を踏み入れる人が相当にあるのではないか、と思えます。そこで聞信徒の中には、われわれ僧侶に向って「浄土真宗も少し現世利益を説いてもらいたい。どうも真宗のお説教を聞いてみると、この世はあてにならぬ、頼みにならぬから、早く念仏して極樂に参らせていただいで幸福の身にさせてもらおうほかはない、というように聞こえますが、そんな話では今日の人間はつ

いてきません。死んでから先のことか判るものか、死んださきのことはどうでもよい。いま、目に見えるご利益の話をしてもらいたい」という人があります。それに対して、わたくしは、つぎのように答えるのです。

「わたくしは浄土真宗ほど大きな現世の利益を説く宗教は他にないと信じています」と。すると相手の人はちよつとなつとくができな

いのです。これは真宗の救いが聞信徒の中にすら十分了解されていないことを物語るもので、まことに遺憾にたえないしだいであります。そこでわたくしは宗教的救済というものについて十分検討する必要があると思

気の時は、病氣さえ治ればいうことはない、といつておりますが、病氣が治ると、また借金ができたので困るといいます。この借金が片づいたならば安心ができるというでしょうが、たとえ、その借金が片づいても、また子供についての心配、家庭についての心配、その他いろいろな苦惱が襲来することは火を見るよりも明らかであります。人間の安心とか喜びというものは、一時的の気休めであり、甘やか

かに過ぎないのです。宗教的救済は、そんな不徹底なものではないと思えます、人生の根本的苦悩を救うものが真の宗教的救済でなくてはなりません。

親鸞聖人は「念仏者は無碍の一道なり」とはつきり念仏者の救済を宣言されました。わたくしは浄土真宗の利益は、この一語に尽き

ます。親鸞聖人は単にことばの上だけで無碍を唱えられたのではありません。九十年のご生涯は、「念仏者は無碍の一道」ということを身をもって示しておられるのであります。聖人のご一生は、ほとんど苦難の連続といつて過言ではないでしょう。ことに晩年のご生活は、住むにわが家なく、暮らすに私財なく、家族は離散し、哀れな居候生活、

やもめ生活を営んでおられたのですが、その中において一言の不平不足をもらしたまわず、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨をく

るところに始めて障りから脱がれうる道が与えられるものと思えます。真宗の聴聞は弥陀の本願を聴くことによつて人生苦の根本が救われる道です。人生苦の根本は何といつても生死無常と煩惱具足にあることは明らかです。したがつて人生苦の根本的救いは、この生死無常と煩惱具足の事実をいかに始末するかということに帰着するのであります。しかし、この二つの事實は、人間の力ではいかんともすることができないのです。わたくしどもの苦しみはいろいろありますが、その根柢にはいつも無常と煩惱の根が張つております。そのため一難去ればまた一難きたつて止む時はないのです。この根本的な苦悩を解決することができたならば、いつさいの苦悩はおのずから解消するでしょう。しかし、この根本苦の解決が人間の力で不可能となれば、どうしたら救われるのでしょうか。人間は救いについては絶望せねばならぬのでしょうか。

ここに、はつきりと裁断を
与えてくださるのが仏の本
願でなくてはなりません。

生死無常と煩惱具足が人
間の力でどうにもならぬと
知りながらも、どうかしよ
うと思う自力根性を捨てや
らぬため久遠劫来流転して
きたのです。いま、その自
力根性に対して絶対不可能
の断を与え、絶対救済を宣
言してくださるものが弥陀
本願の勅命であります。わ
たくしども、この唯一真実
の勅命の前には、ひたすら
帰順するほかはありません。
もし、したがわれないならば、
真の意味において生きるこ
とはできないのです。本願
を信ずるとは真実に生かせ
ていただくことです。もし
わたくしどもが真の意味に
おける生活を求めないなら
ば、本願を信ずる用はない
でしょう。しかし、ひとた
び真の生活―自由と永遠
を求めるならば、本願を信
じ、念仏に立ち上がるほか
はありません。本願を信じ
念仏することは、どうして
も、そうせずにはおられな
い必然の道であることに目

ざめねばなりません。この
目ざめこそ聴聞によってあ
たえられるものであります。
そこで真宗の聴聞は救いの
自覚であるともいえるのでし
ょう。

自分の無知無能を真実に
知ること、自分の力では
できません。これは仏智の
鏡に照らされて始めて知れ
るのです。『御本書信卷』の
三信釈は何をお示しになっ
ていますか、弥陀の本願を
お説きになっていらっしゃる
はありますが、けつきよく、
わたくしの真の姿を浮彫り
にしてくださいましたものであ
ります。弥陀の本願を聞く
ことよって自分の無知無
能を明らかに知らせていた
だけば、そこにおのずから
自力を捨てて弥陀がたのま
れるのです。その信境は知
恩報徳以外の何ものでもあ
りません。ここにおいては、
たとえ山なす苦難が襲来し
ようと、ご恩に立ち上が
ることよって、すべての
苦難が解消されていきます。
親鸞聖人が「念仏者は無碍
の一道」と仰せられたのは、
まったくこの信境を端的に

指示されたものといいただ
べきであります。

真宗の聴聞とはお話を聞
くことではありません。如
来のお慈悲によつて救われ
ることあります。救われ
るとは、法を聞くことによ
つて凡夫が如来浄土の門を
くぐらせていただくことで
あります。

（了）

【住職雑感】

副住職（長男）が作成している「念佛
寺ホームページ」は「西宮市 念佛寺」

で検索すれば出てきます。内容は行事予
定のほか、寺報（PDF）、各種の信心
語録、住職の小さな論文、その外にいく
つかの音声法話などです。最近、副住職
からの提案で信心語録の解説をしたらど
うかということ、手始めに「松並松五
郎念仏語録」の中の言葉を二人の会話形
式でいくつかを小さな動画でアップしま
した。コロナ禍で人への仏法伝達の方法
を今日ではネットを使用しておられる方
が増えてきたのは必然だと思います。仏縁
を広げるのにネット伝道はますます盛ん
になると思います。実際世界的な佛教者
のドライ・ラマ師とかチック・ナット・
ハーン師の法話まで動画で見聞でき、え
らい時代になりました。ただネットの動
画は玉石混合で、何を見、何を聞くかが
人それぞれの課題になりましょう。

どう迷っているのか

①「南無阿弥陀仏という仏さ
まはどんな仏さまですか？」

②「仏さまはどんなことをい
つておられますか？」

③「念仏申すとどうなります
か？」

④「私たちはどんなふう迷
っているのですか？」

⑤「私たちは仏になれるでし
ょうか？」

⑥「なんで私が仏さまになれ
るのですか？」

とのご質問について。

今回は④「私たちはどんな
ふう迷っているのですか？」
という質問ですが、これにど
う答えるか。これについては
多様な答えがありましょう。
まず仏教では迷いのことを「無
明」といいます。存在に貫い
ている根本的な真理に対して
私たちがそれを知らないこと、
これを無明といいます。この
無明から様々な倒錯が発生し、
歪みや悪徳や苦悩が起ると仏
教では説かれています。

ではその根本的な真理とは
何か。これについても古来い
ろいろ説かれています。無我
の真理とか空の真理とか縁起
の道理とか、仏教では多様に
説かれています。ここでは
浄土真宗の視点から考えてみ
たいと思います。

人間存在に於て根本的な真
理とは何かということですが、
これを親鸞聖人のお言葉に求
めますと「撰取不捨の真理」
というお言葉にであります。

これが根本の真理を表してい
ると私は思っています。

「どんなふう迷っている
のか」、それは私たちが撰取不
捨の真理に対して無知だとい
うことです。「撰取不捨の真理」
を知らない、そこに人間存在
の根本的な問題がありましょ
う。

では「撰取不捨の真理」と
は何かと言えば、それはアミ
ダ仏（光明無量・寿命無量）
と人（衆生）との基本的根本

と人（衆生）との基本的根本

的な関係の真理だと伺います。

そのアミダ仏とは、量りなきいのちであり量りなき光明（智慧と慈悲）であります。このことは覚れる積尊の教言（経典）によってすでに説かれてあります。

さて、撰取不捨とは、アミダ仏は人（衆生）を撰め取って捨てない用きだということです。アミダ仏と人は離れがたく一つであるということ。それは時のはじめから離れない、過去も未来も現在においても見捨てない。アミダ仏と人は別な存在でありながら、一点のすきまなく一つであるということ。私はアミダ仏ではない、アミダ仏は私ではない。しかしアミダ仏は私と一瞬も一点も離れない、隙間なく離れなく一つである、というそういう真理です。人だけでなく万物に於ても成立している真理です。

ただし、アミダ仏と人の関係は離れがたく一つであつても、その関係構造には秩序があります。人（私）はアミダ仏に於てはじめて存在しえる。

存在論的に言えば、アミダ

仏は私という個物がなくても存在している。しかし私はアミダ仏がなくては存在しえない。人はアミダ仏に於て存在しているのです。

アミダ仏は人を存在せしめている根拠であります。喩えて言えば、アミダ仏は大海であり、私は波の一つであります。

そこで清沢満之師はアミダ仏について、「私をして私たらしむる能力の根本本体が、即ち如来である」（「我が信念」といわれています。

更に救済論から言えば、アミダ仏は救い手であり、私は救われ手であります。

「どんなふう迷っているのですか」。それはアミダ仏のいのちの中に置かれていながら、それを知らずに孤立していることです。丁度、母親の慈愛の手にだかれています赤子が、母親の慈愛の手に抱かれていると知らないで、ひとりぼっちのように思っていることです。この状況を更に詳しく述べますと

——自分は自分の力で生き

ていると思つている。私は私であつてこの世界とは別物と思つている。そこからいろいろな思い煩いが起こってくる。

私は私として存在するためにいつも衣食住を確保しておかねばならないと煩つている。死ぬことは私の人生が無意味化され、不幸であり、私にはあつてはならないことだと思つている。私の存在を安定させるためにお金と健康と有利な地位と有利な仕事をいつも確保しておかねばならないと計らいながら生きています。自分より有利な地位にいて自分より優れた能力のある人に対して嫉みを離れない者として生きています。自分の願望に都合の良い人を愛し、都合の悪い人を嫌い、その他の人には無関心になる、そういう人間関係に生きるようになる。自分分は他者や社会からどう評価されるのかをいつも気にかけて、社会からつまはじきにされ、見放され、見下されるのを恐れ、転落することを怖れつつ生きています。常に根本的な欠乏を感じ、満たされず、物足りなく、それゆえいつかは幸せになれると未来に夢を

描く存在、あるいは夢さえ描くことができなくなつてその日その日を仕方なく生きるか、あるいは様々な娯楽に気晴らしをして生きるか、そういう形で生きていく存在。生きていくそのことや、周りの自然そのものへの新鮮な感動が失われて、当たり前ばかりの日常生活が繰り返されるため、より刺激の強いものを求めざるを得なくなつて生きていく

——。 「私たちはどんなふう迷つていくのですか？」ということですが、アミダ仏と離れて生きるということは孤立しているということに留まらず、私と環境、私と世界、私と人々との間に心のへだたりができてしまつていくともいえましよう。世界と自分とが分離してしまい、薄いベールで覆われたようになります。当然、孤独感や空虚感、そしてうつとうしい感情が湧いてきます。山も川も植物も人々に対しても生き生きとした実感が薄れてしまいます。

このむなしさはどうすることもできませんから、外に強

い刺戟や快感を求め、憂鬱な気分を晴らすとしていろいろな娯楽、享樂、快樂、道樂を求めて、日々のやりきれなさを解消しようとしみます。

そういう人のいのちは丁度チューリップの花を大地から引き抜いた状態のように、花としての形はありますが、中は「死んでいる」のです。極端に言えば「生ける屍」となつていきます。

今日、宗教がなぜ必要か、それは「生ける屍」となつてしまつた状態から復活するといふ課題こそが現代の宗教の救いであると言つても過言ではないと思ひます。

死ぬのが不安という死の問題とか、「後生の一大事」いわば死後にどこへ行かかといふ問題とか、エゴイズムをどう克服するかという罪の問題もさることながら、現在「生ける屍」のようになつてしまつた自分をどう息を吹き返すかといふ問題が、宗教が応えべき大きな課題だと思ひますし、真実の宗教はそれに答えていると思ひます。

（了）